



■令和元年度沖縄県高校生議会

11/7



沖縄県は、議会100年記念行事の一環として高校生議会を開催し、参加高校生本人の貴重な体験に資するとともに、県民に開かれた議会を推進する、という趣旨で平成21年に沖縄県高校生議会を開催しています。今回11月7日、10年振りに



高校生議会が開催されました。本校からも2年生 稲福明李さん、知念鈴さん、幸地玲奈さん、渡慶次莉枝さんの4名が参加しています。4名は、事前に子どもの貧困問題などを調査し当日議会では、「個人で子ども食堂を行っている方に対しての助成金の援助について」「子ども食堂に関する広報活動について」、などを堂々とした態度で質問していました、と生徒会顧問の奥濱藍先生から職員会議で報告がありました。稲福さんは、議会を進行する議長の役も体験したとのこと。『**気づき、考え、行動**』した4名、『**貴重な体験**』になったことでしょう！！

■2年生インターンシップ 11/13～11/15



勤労の尊さや創造する喜びを体得すること、望ましい勤労観・職業観や基本的なマナー、異世代とのコミュニケーション能力を育成すること、自己の職業適性や将来設計について考えるなどの目的で、11月13日からの3日間、2年生全員を対象にインターンシップが実施されました。地域の100力以上の事業所には大変お世話になりました。事故や怪我もなく全員無事にインターンシップを終えることができました。インターンシップの目的が達成され、それぞれの将来設計に有意義な取り組みになったことだと思います。

■進路学習会 職員研修 11/14

11月14日放課後、ベネッセコーポレーション沖縄担当の岡崎瑞祈さんを講師にお招きして、先生方を対象とした学習会を実施しました。テーマは、生徒の『学び続ける力』をいかにして育成するか、ということです。少子高齢化、グローバル化、人工知能による労働環境の変化など、『**将来の予測が出来ないこれからの社会を生き抜くには、『学び続ける力』を身に付けさせることが益々必要**』だということです。しかし、現状では多くの生徒が「何故勉強をしなくてはいけないのか分からない」「何をすればいいのかわからない」「してもどうせ意味がない」など学習に対する悩みがあるとのことでした。皆さんはどうでしょうか？そこで、勉強の意味、価値を丁寧に伝えること、学習に向かう姿勢づくりや、生き方や働き方と学ぶことを結び、必要性を示すこと、達成感や成功体験を積ませることなどが大切であるとのことでした。

以上、先生方の勉強会の内容ですが、皆さんにも何らかの参考になると思い紹介しています。これからの時代、『**学び続ける力**』はとても大切です。そのためにも、『**学習時間を確保し学習を習慣づけ、毎日「予習、授業、復習」を頑張ってください。**』決して無駄なことにはなりません。必ず自分の為になります！！

■本の紹介コーナー

題名: 逝きし世の面影

著者: 渡辺京二

数学者藤原正彦先生は、「1に国語、2に国語、3、4がなく、5に算数」といい、人工知能研究者の新井紀子先生は、「1に読解、2に読解、3、4が遊びで、5に算数」で「遊び」は「手先や身体を動かす、モノに頼らない遊び」という。読解力の大切さを強調しているのである。どの教科でも教科書を読み理解できないことには勉強にならない。読解力は勉強をするための必要条件なのだ。読解力を身に付けるためには本を丁寧に、沢山読むことであろう。もちろん、読書は読解力を身に付けるためだけのものではない。読書は「知識・感情・意志」に働きかけるから、より豊かな人生を過ごすためにも大切なことなのである。藤原先生は大学で読書ゼミを開講していた。受講条件が面白い。まず、毎週一冊の文庫を読む根性があること、毎週一冊の文庫を買う財力があること、そしてレポートを提出し、ディスカッションすること。そのゼミの内容が1冊の本になった。題名は『名著講義』。本書『逝きし世の面影』はその『名著講義』で取り上げられた本の1冊である。



米国の国際政治学者サミュエル・ハンティントンは著書『文明の衝突』で、世界の文明を西欧文明、アフリカ文明、中華文明など8つに分けている。日本文明もそのうちの1つとしているが、一国で一文明は日本だけである。それだけ日本はユニークな文明の国なのである。その日本に幕末から明治にかけて沢山の外国人がやってきた。彼らは、日本人や日本の様子を日記や手紙、滞在記などで残している。本書は、それらの膨大な史料を読み解き事実の検証を重ねるなどして、その頃の日本人や日本の姿を映し出している。その頃の外国人の感想を幾つかひろくと、く地上で天国あるいは極楽にもっとも近づいている国だ(英国アーノルド)、く人びとは幸福で満足そう(米国ペリー)、く地球上最も礼儀正しい民俗(仏国ポーヴォワル)などがある。イザベル・バード(英国紀行作家)も明治11年の日本を旅している。ある日、旅を終え宿で馬の革帯がないのに気づく。くもう暗くなっているのに、その男はそれを探しに一里も引き返し、私がお金を与えようとしたのを、目的の地まですべての物をきちんと届けるのが自分の責任だと言って拒んだ。ことなど、く民衆の無償の親切に出遭って感動)している。古き良き時代の日本の姿であるが、しかしそれも明治末期頃までには近代化の波にのまれてく(ひとつの文明)は滅亡したとある。それを教えてくれたのもく(実は異邦人観察者の著述)であると。本書解説の最後にはく(その過去は私たちの心性の中で死に絶えてはいない。かすかに囁き続けるものがあるからこそ、逝きし日の面影は懐かしいのである)とある。「降る雪や明治は遠くなりにけり(中村草田男)」。今年は「平成」から「令和」に変わり「昭和」もまた遠くなった。